

母性看護学実習における男子学生の看護技術体験状況と実習目標達成、実習環境についての認識

¹富山福祉短期大学看護学科 ²富山県立大学看護学部 ³金沢医科大学看護学部

¹稲垣 尚恵、²村田 美代子、³北濱 まさみ、

要旨

男子学生の母性看護学実習における看護技術体験状況と目標達成、実習環境についての認識を調査し、教育課題を検討することを目的とし、研究を行った。対象者はA短大の母性看護学実習を終了し研究参加に同意した男子学生 8 名。無記名自記式質問紙を用い、妊娠期・分娩期・産褥期・新生児期に分け、見学を含む体験状況を調査した。実習目標達成についての認識は 5 段階評価法を用い、実習環境については自由記述欄を設け調査した。質問紙の結果は単純集計、自由記述内容は、質的帰納的分析した。悪露交換を体験できた学生はいなかったが、子宮底触診は半数以上が体験していた。新生児に対する全ての技術を約 8 割の学生が体験していた。実習環境についてカテゴリー1, 『男子学生ならではの困難感』2, 『実習体制の効果』3, 『実習の達成感』4, 『父性観の発達』の 4 つのカテゴリーが得られ、対象が若い女性である実習には性差による困難感を感じながら臨んだが、実際に母子と関わることで男性役割を理解し、父性観を発達させ実習目標を達成していた。看護師として、性差による制約があっても女性の健康状態を統合的にアセスメントできる能力が必要であるため、普段の授業からそれを踏まえた指導を行っていく必要性が示唆された。本研究は富山福祉短期大学倫理委員会の承認を得て実施した。(承認番号: 福短 H30-007 号)

キーワード: 母性看護学実習 男子看護学生 看護技術

Male Students' Experiences of Nursing Skills in Maternity Nursing Practice and Their Perceptions of Achievement of the Practice Goals and of the Practice Environment

1 Toyama College of Welfare Science, Department of Nursing

2 Toyama Prefectural University, Faculty of Nursing

3 Kanazawa Medical University, Faculty of Nursing

1 Hisae Inagaki

2 Miyoko Murata

3 Masami Kitahama

Abstract

To examine educational issues in maternity nursing practice, we conducted a study to investigate male students' experiences of nursing skills in maternity nursing practice and their perceptions of achievement of the practice goals and of the practice environment. The subjects of our survey were 8 male students who had completed their maternity nursing practice at a Junior college A and agreed to participate in this study. An anonymous, self-administered questionnaire was used to study their experiences, including visits, of different periods: gestation, delivery, postpartum, and neonatal periods. The perception of achievement of the practice goals was assessed by a five-level evaluation method, and that of the practice environment was studied with a free description section in the questionnaire. The results of the questionnaire were analyzed by simple tabulation, while the contents of the free description section was analyzed qualitatively and inductively. On review, none of the students were able to experience lochia exchange, but more than half of the students experienced fundal palpation. About 80% of the students experienced all skills for newborns. Regarding the practice environment, 4 categories of perception were found: (1) the sense of difficulty in practice, (2) the usefulness of practice, (3) the sense of achievement in practice, and (4) the development of paternal view. While they found some difficulty due to gender difference in a practice that is targeted for young women, they were able to understand men's roles through actually interacting with mothers and children and developed paternal views, achieving the practice goals. It is necessary for a nurse to be able to assess women's health conditions comprehensively, regardless of potential limitations due to gender difference. To this end, it is suggested that guidance needs to be provided accordingly in regular classes. This study was conducted with the approval of the Ethics Committee of Toyama College of Welfare Science. (Approval number: Fuku-Tan H30-007)

Keywords: maternity nursing practice, male nursing students, nursing skills

1. はじめに

臨地実習は、看護の知識・技術を統合し、実践へ適用する能力を育成する教育方法の一つである。学生は対象者に看護行為を行い、その過程でより一層対象理解を深める。看護学生において、学内で学んだ知識・技術・態度を統合し、看護実践能力を培う臨地実習は、看護基礎教育には欠くことのできない重要な学習である。平成2年度の看護教育カリキュラム改訂に伴い、男子看護学生（以下：男子学生）の母性看護学実習は必修となった。

母性看護学実習では、陰部や乳房など女性外性器の観察や、身体に直接触れる技術が多い。そのため、特に男子学生が関わることは、妊産褥婦の心身の負担となり、学生の受け持ちを拒否されることも少なくない。実際に、実習を前にした男子学生から、母性看護学実習の意義が見出せないといった言動や、年齢が近い女性を対象とすることに対する性差を意識した不安、関わりを拒否される可能性に対する緊張感などの訴えがあった。

先行研究から、男子学生は母性看護学実習前に、男性特有のストレスや困難感を感じ、対象である女性を理解する学習への消極的感情を抱き、対象への看護が導き出せないことによる実習に対する不全感を感じていたことが明らかになっている¹⁾²⁾。さらに、臨床指導者や教員の指導など実習環境が男子学生の実習に対するモチベーションに関与することが明らかとなっている³⁾⁴⁾。本研究は、これまでは調査されていない、A短期大学での母性看護学実習における男子学生の看護技術体験状況と実習目標達成、実習環境に対する認識について調査し、教育課題を検討することを目的に行った。

用語の定義

- ・男子看護学生：看護基礎教育の過程にある男子学生であり、本文では「男子学生」と表記する。
- ・母性看護学における看護技術：妊娠、出産、産褥、新生児期の看護に必要な技術で、看護師として修得すべき技術のことである。
- ・体験できた技術：本文では見学及び一部体験した技術も「体験できた技術」に含む。

2. 研究目的

母性看護学実習における男子学生の看護技術体験状況と実習目標達成、実習環境についての認識を調査し、教育課題を検討する。

3. 研究方法

3. 1 研究期間

2018年9月1日～2018年10月31日

3. 2 調査対象

母性看護学実習を終えたA短期大学の3年男子学生で、研究参加に同意した8名。

3. 3 調査方法・内容

調査対象者に、無記名自記式質問紙を用いて、以下の内容について調査した。

1) 【実習での看護技術体験状況】

実習で看護学生が体験し得る看護技術を①妊婦に対する看護技術、②産婦に対する看護技術、③出生直後の新生児に対する看護技術、④褥婦に対する看護技術、⑤新生児に対する看護技術に分け、技術体験チェックリストを作成した。実習中に体験した項目を選択し回答とした。

2) 【実習目標の達成についての認識】

実習目標に掲げられている内容に、技術体験と目標達成に対する認識についての質問を加え、①<母性看護における看護技術について実施・体験できた>、②<母性看護における看護技術について理解できた>、③<母性看護における男性の役割について理解できた>、

④<母性看護学実習を終え、母性観・父性観・生命観について考えることができた>、⑤<母性看護学実習を終え、良かったという気持ちや達成感がある>、⑥<母性看護学実習の実習目標は達成できた>、⑦<母性看護における看護技術の実施について困難があった>の質問に5段階評価法を用いて回答とした。

3) 【実習環境についての認識】

質問紙に、実習環境について感想や意見を自由記述できるように記載欄を設けた。

3. 4 データ分析方法

質問紙による結果は単純集計し、自由記載された内容については、質的帰納的に分析し、研究者間でカテゴリー分類した。

3. 5 倫理的配慮

母性看護学実習終了後、対象者に文書を用いて調査の主旨と研究目的を説明した。調査研究に参加しなくても何の不利益も被らないこと、参加同意した後でも中断することができることを説明した。調査に協力が得られる場合は同意書に署名を得た。質問紙は無記名とし、得られた情報は本研究の目的以外では使用しない。本研究は富山福祉短期大学の倫理審査委員会の承認を得て実施した。(承認番号：福短 H30-007 号)

4. 母性看護学実習の概要

4. 1 母性看護学実習目的

妊娠・分娩・産褥・新生児の各期の対象とその家族過程の特徴を理解し、母子とその家族における看護の展開について学ぶ。さらに、女性の健康づくりと母子保健の現状について体験的に学び、これらの学習を通して自己の生命観、母性・父性観を発達させる。

4. 2 母性看護学実習目標

- 1) 妊娠・分娩・産褥・新生児の各期の対象とその家族過程の特徴を理解する。
- 2) 受け持ち事例をとおして母子とその家族における看護の展開について学ぶ。
- 3) 女性の健康づくりと母子保健の現状について体験的に学ぶ。
- 4) 自己の生命観、母性・父性観について発達させる。

4. 3 実習方法

2単位、90時間の必須科目。1クール3週間で、4部門(産科病棟・産科外来・市町村保健センター・助産院)をローテーションし、実習している。1クールあたり15~20名のグループ編成で、男子学生は女子学生とペアを組んでいる。母性看護技術の体験は、妊産褥婦と新生児に対して、産科病棟及び産科外来の実習で行っている。実習には教員が同行し、直接的な援助の見学及び実施は実習指導者が対象者に同意をとり、指導者か教員と共に実施している。対象者が同意しなかった場合は、見学及び実施はせず、女子学生や実習指導者から情報を得ている。

5. 結果

5.1 参加者の属性

母性看護学実習を終えたA短期大学の3年男子学生8名、平均年齢23.4歳。

5.2 【実習での看護技術体験状況】 (図1)

<妊婦に対する看護技術>

尿検査は5名(62.5%)、レオポルド触診法は5名(62.5%)、NST装着は7名(87.5%)、NST判読は8名全員(100%)が体験していた。

<産婦に対する看護技術>

分娩見学は2名(25%)、分娩中の胎児心拍の聴取は1名(12.5%)、分娩直後の子宮底触診は3名(37.5%)と半数未満の体験となり、悪露交換は1名も体験できなかった(0%)。

胎盤計測は4名（50%）の学生が体験できた。

＜出生直後の新生児に対する看護技術＞

胎盤計測4名（50%）、出生直後の新生児の身体測定が4名（50%）の学生が体験していた。アプガールスコア採点は3名（37.5%）、呼吸確立のケアも3名（37.5%）と、半数未満の体験となった。

＜褥婦に対する看護技術＞

浮腫の観察は4名（50%）、子宮底触診は5名（62.5%）と、半数以上が体験していた。悪露の観察は1名（12.5%）、乳房観察と授乳時のポジショニングは3名（37.5%）と、体験できた学生は半数未満であった。

＜新生児に対する看護技術＞

バイタルサイン測定、体重測定、体重減少率計算、身長計測、K2シロップ投与、黄疸の観察、抱っこ、おむつ交換、全ての技術において、6～7名（70～80%）の学生が体験できた。

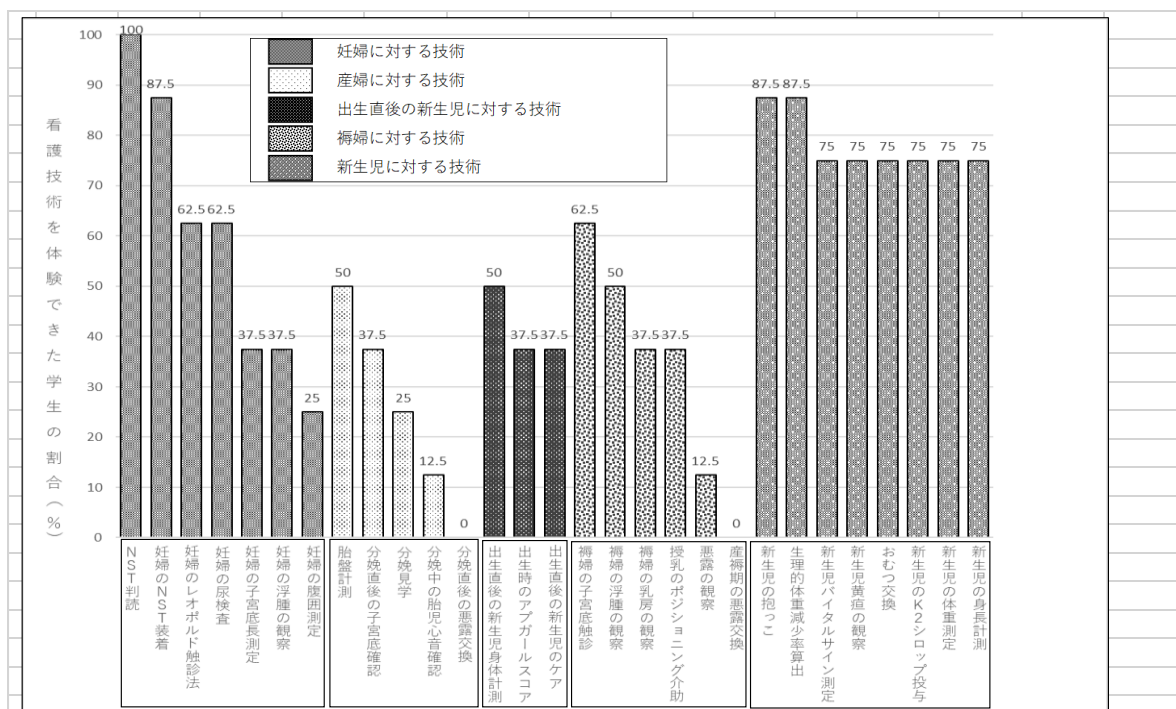


図1：実習での看護技術体験状況

5.3 【実習目標の達成についての認識】（表1）

①＜母性看護における看護技術について実施・体験できた＞

「かなりそう思う」1名（12.5%）、「まあまあそう思う」5名（62.5%）、「どちらでもない」2名（25%）となった。

②＜母性看護における看護技術について理解できた＞

「かなりそう思う」「まあまあそう思う」を合わせると80%となった。

③＜母性看護における男性の役割について理解できた＞

「かなりそう思う」と「まあまあそう思う」を合わせると80%以上となった。

④＜母性看護学実習を終え、母性観・父性観・生命観について考えることができた＞

「かなりそう思う」と答えた男子学生は5名（62.5%）、「まあまあそう思う」1名（12.5%）であった。

⑤＜母性看護学実習を終え、良かったという気持ちや達成感がある＞

「かなりそう思う」と答えた男子学生は5名（62.5%）であった。

⑥＜母性看護学実習の実習目標は達成できた＞

「かなりそう思う」と答えた男子学生は3名（37.5%）、「まあまあそう思う」3名

(37.5%)であった。

⑦<母性看護における看護技術の実施について困難があった>

「かなりそう思う」と答えた男子学生は2名(25%)、「まあまあそう思う」2名(25%)、「どちらでもない」3名(37.5%)、「全くそう思わない」1名(12.5%)であった。

表1：実習目標の達成についての認識

目標達成についての認識	かなりそう思う	まあまあそう思う	どちらでもない	あまりそう 思わない	全くそう思わない
1.母性看護における看護技術について実施・体験できた。	12.5%	63.0%	25.0%	0.0%	0.0%
2.母性看護における看護技術について理解できた。	12.5%	75.0%	12.5%	0.0%	0.0%
3.母性看護における男性の役割について理解できた。	75.0%	0.0%	0.0%	12.5%	12.5%
4.母性看護学実習を終え、母性観・父性観・ 生命観について考えることができた。	62.5%	12.5%	12.5%	12.5%	0.0%
5.母性看護学実習を終え、良かったという気持ちや達成感がある。	62.5%	12.5%	0.0%	25.0%	0.0%
6.母性看護学実習の実習目標は達成できた。	37.5%	37.5%	0.0%	25.0%	0.0%
7.母性看護における看護技術の実施について困難があった。	25.0%	25.0%	37.5%	0.0%	12.5%

5.4【実習環境についての認識】(表2)

自由記載された内容から、男子学生に特化した記述を抽出し、4つのカテゴリー、『実習の困難感』、『実習体制の効果』、『実習の達成感』、『父性観の発達』と13のサブカテゴリーが得られた。カテゴリーを『 』、サブカテゴリーで[]で示した。

カテゴリー1、『男子学生ならではの困難感』

[褥婦の病室に訪室することへの抵抗感]、[母性看護学実習での学びの活かし方を見いだせない自分]、[男性を理由にケア実践が制限されることの実感]、[若い女性へのケア実践の困難性]、[男性としての気まずさからくるケア実践の困難性]で構成されていた。

カテゴリー2、『実習体制の効果』

実習中の[教員の同行による安心感と学習の補足強化]、[教員や女子学生からのサポートによる対象理解]で構成されていた。

カテゴリー3、『実習の達成感』

[実習体験から深まった母性看護学の理解]、[保健指導を実践できた経験]で構成されていた。

カテゴリー4、『父性観の発達』

[同性として父親を支援する男子学生の視点]、[将来、父親になる身としてイメージした母子支援]、[新生児との関わりから芽生えた父性観]で構成されていた。

表2：実習環境について感想及び意見

カテゴリー	サブカテゴリー	学生の自由記載の内容
1、男子学生ならではの困難感	褥婦の病室に訪室することへの抵抗感	褥婦のベッドサイドに行くのに少し抵抗があった。
	母性看護学実習での学びの活かし方を見いだせない自分。	将来、産科領域で働くことのない男子学生にとって、母性の実習を今後どう臨床と結びつけていけばよいかわからない点があった。
	男性を理由にケア実践が制限されることの実感	ケア計画しても、指導者から「男性なので遠慮して下さい」と言われて、実施できないことが多かった。
	若い女性へのケア実践の困難性	対象が若い女性なので、関わる上で苦労した。
	男性としての気まずさからくるケア実践の困難性	実習での実践は、気まずく行いにくかった。
2、実習体制の効果	教員の同行による安心感と学習の補足強化。	教員が病棟にいたことで、安心感があった。 分娩室の中など詳しく知ることができた。
	教員や女子学生からのサポートによる対象理解	病棟内で、先生の巡回が細かくされていたことや、女子学生とペアで行う事で、受け持ち褥婦の悪露の性状を後から聞く事ができた。
3、実習の達成感	実習体験から深まった母性看護学の理解	とてもわかりやすい内容で母性看護学の理解が深まった
	保健指導を実践できた経験	パンフレットを用いて保健指導の実践ができたことは良い経験でした。
	実際の関わりから深まった対象の理解	電子カルテからの情報だけでなく、実際に関わることで今現在の状態を知ることができた。
4、父性観の発達	同性として父親を支援する男子学生の視点	男子学生として、父親教室などで、同じ男性としての関わりができた。
	将来、父親になる身としてイメージした母子支援	将来父親になる身としては、自分の妻や子供に対してどうい支援をしていけば良いのだろうと考えるきっかけとなり、大変有意義な実習であった。 この先どのように子供と関わっていけばよいかといったことについて考えることができた。
	新生児との関わりから芽生えた父性観	新生児と多く関わることができ、自身の父性観について考えることができた。

6. 考察

6. 1 母性看護学実習における看護技術の体験状況

男子学生は、妊婦・産婦・褥婦・新生児それぞれに対する看護技術を幅広く体験できていた。中でも、新生児のバイタルサイン測定、体重測定、体重減少率計算、身長計測、K2シロップ投与、黄疸の観察、抱っこ、おむつ交換といった、フィジカルアセスメントや子宮外生活適応を促進する新生児に対する看護技術すべてを70～80%の学生が体験していた。成田ら⁵⁾の研究結果でも、新生児に対する看護技術は多くの学生が体験していた。今回、新生児に対する看護技術の体験について、褥婦から同意が得られやすく、学生が経験する機会が多かったことが考えられる。男子学生は新生児に対する看護技術の体験から父性観が芽生え、同性として父親を支援する視点を持ち、将来父親になる身として母子支援をイメージすることができ、自己の父性観を発達させていた。

褥婦に対する子宮底の触診と浮腫の観察も半数以上の男子学生が体験できていた。子宮底や浮腫の観察は、腹部及び下肢の最小限の露出で観察が可能であり、褥婦にとって男子学生が触れることに抵抗感が少なく、同意が得られやすかったと考える。一方、悪露交換は1人も体験できなかった。笹木ら⁶⁾の研究でも、褥婦に対する看護技術で学生の実施経験が多かった技術は子宮底の触知で、実施経験が少なかった技術は外陰部の消毒であり、今回の調査で同様の結果が得られた。悪露交換は、会陰部を露出し触診や観察を伴うため、女性にとっては羞恥心が強い援助となるため、学生が見学及び体験することについて、褥婦の同意が得られない場合が多い。そういった要因に加えて、今回の実習施設の場合、悪露交換は分娩後2時間までは看護職が行うが、それ以降は褥婦自身がセルフケアとして行う。そのため、日常的な看護援助としては行われておらず、学生が体験できる機会がなかったことも体験できた学生がいなかった要因である。

しかし、悪露の性状や量は、褥婦の子宮復古状態をアセスメントする上で重要な情報であるため、直接的な観察ができない中でも、必要な情報を意図的に得る必要があった。今回男子学生は、子宮底の触診によって子宮の収縮状態については確認できていたが、悪露の性状や量については、直接観察はできず、女子学生が得た情報を共有することで、子宮復古状態のアセスメントに繋げていた。

男性看護師の就業数は年々増加している。松田ら⁷⁾は男子学生が就職先を選択するときの

傾向を調査し、精神科、救急外来、手術室、ICUなど、性別から生じる役割葛藤の少ない領域を選択する傾向があることを明らかにした。しかし、こういった領域でも、あらゆるライフサイクルにある女性に関わる機会は少なくないため、女性の安全安楽に配慮した看護を学ぶことは重要である。そして、夫やパートナーなど家族も看護の対象であるため、同性の立場で支えることは男性看護師の役割として大きい。

また、女性を対象とした看護において、性差による制約が生じた場合でも、援助の必要性を誠実に説明し、必要な情報を意図的に得て、健康状態をアセスメントできるような能力が必要となる。伊藤ら⁸⁾の研究では、母性看護学実習において、直接的な看護ケアを行うことに意義があるのではなく、母性看護を学ぶことに意義があることを伝えることが重要であるという結論を導き出している。看護技術だけでなく、女性の健康状態を統合的に捉えるアセスメント力を身につけるためにも、男子学生が母性看護を学ぶことには大きな意義があるといえる。よって、母性看護技術の演習や授業の中で、男性看護師としての役割や、女性の健康状態を統合的にアセスメントできる能力の必要性について伝えていくことが重要である。

6. 2 母性看護学実習における目標達成と実習環境についての認識

男子学生の半数が「母性看護における看護技術の実施について困難があった」と回答していた。実習環境についても、[若い女性へのケア実践の困難性]、[男性としての気まずさからくるケア実践の困難性]といったように、性差を意識し『男子学生ならではの困難感』を抱きながら実習に臨んでいた。しかし、8割の学生は、「母性看護における看護技術について理解できた」、「母性看護における男性の役割について理解できた」と回答し、半数以上の学生は、「母性看護学実習を終え、母性観・父性観・生命観について考えることができた」、「母性看護学実習を終え、良かったという気持ちや達成感がある」と回答していた。

若い女性を対象とする母性看護学実習に、性差による困難感を感じながら臨んでいたが、実際に母子及び父親との関わりから、[同性として父親を支援する男子学生の視点]を持つことができていた。また、[将来、父親になる身としてイメージした母子支援]、[新生児との関わりから芽生えた父性観]について想起し、実習目標の1つである『父性観の発達』につなげることができていた。原田ら⁹⁾は、臨地実習における学生の達成感に影響する要因について、既習の学習やこれまでの経験が役立ったことを挙げており、[実習体験から深まった母性看護学の理解]、[保健指導を実践できた経験]が『実習の達成感』につながったと考えられる。また、尾原ら¹⁰⁾は、男子看護学生が母性看護学を学ぶ意義として、夫や男性の立場を理解した支援ができること、看護師と男性としての視点両者を併せ持ち、男性の目線からアドバイスや看護が行えることとしており、今回の実習で男子学生の多くは、母性看護学を学ぶ意義を認識している可能性が示唆された。

一方、[母性看護学実習での学びの活かし方を見いだせない自分]といった記載もあった。眞鍋ら¹¹⁾は、講義や実習前の学習で習得した知識や理論と実際の援助が統合されるような経験の積み重ねが自己効力感の向上に関与すると述べている。今回の実習では、男子学生の一部は、これまでの学びを対象の援助に活かされていることを実感できなかった可能性がある。

実習環境について、[教員の同行による安心感と学習の補足強化]、[教員や女子学生からのサポートによる対象理解]について記載していた。先行研究では、教員からの後押しや見守りによる心強さがあったことやグループメンバーが自分を支えてくれているという実感が母性看護学実習における男子学生のモチベーションを高める要因となっていた³⁴⁾。今回、女子学生とペアで対象を受け持ち、情報共有しながら対象理解できたことは、男子学生の安心感につながり、モチベーションを高めた可能性がある。

少子化により分娩件数が減少する中、母性看護学実習において看護学生が母子を受け持つ機会を得ることは貴重である。効果的な実習には、対象者とその家族の理解と協力、実習施設の理解と協力、実習病棟の指導体制など実習環境が影響する。今回の実習では、教員の同行や援助を行う際に実習指導者と共に行うこと、女子学生との情報共有は、モチベーションだけでなく、男子学生が対象への援助を通して、実習目標を達成する上で有効な実習環境であった可能性が示唆された。今後さらに教員と実習指導者が学生のレディネスを共有し、男子学生が講義や実習前の学習で習得した知識や理論を統合させ、実際の対象の援助に活かされることを経験

できるように調整することが重要である。

7. 結論

- 1) 男子学生は、妊婦・産婦・褥婦・新生児に対する技術を広く体験し、新生児に対する多くの技術体験から、自己の父性観を発達させていた。
- 2) 実習環境について 1,『男子学生ならではの困難感』2,『実習体制の効果』3,『実習の達成感』4,『父性観の発達』の4つのカテゴリーが得られた。性差による困難感を感じながら実習に臨んだが、男性役割を理解し実習目標を達成できたと認識していた。
- 3) 母性看護学では、女性の健康状態を統合的にアセスメントする能力の必要性を伝えていくことが重要である。

引用文献

- 1) 三宅順、近藤大貴他、男子看護学生に特有の臨地実習におけるストレスと対処行動、日本看護学会論文集 看護教育、第40回、P.30-32、2009
- 2) 大野理恵、長鶴美佐子、男子学生が母性看護学実習前から実習終了までに抱く困難感、日本看護学会論文集 看護教育、第48回、2018
- 3) 佐藤愛、高橋由美子他、母性看護実習での男子学生のモチベーションに影響する要因、青森県立保健大学雑誌、8巻、P.15-22、2018
- 4) 石川恵子、内海桃絵、看護学生における臨地実習へのモチベーション、京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻紀要、第11号、P.11-16、2016
- 5) 成田恵美子、渡邊竹美、糖塚亜紀子、篠原ひとみ、兒玉英也、母性看護学実習における学生の看護技術経験の認識に関する調査、秋田大学医学部保健学科紀要15(1)、P.58-67、2007
- 6) 笹木葉子、小堀ゆかり、母性看護学実習における学生の技術経験状況調査—学生の母性看護学実習技術チェックリストから—、北海道文教大学紀要、2011
- 7) 松田安弘、舟島なをみ、杉森みど里、男子看護学生の学習経験に関する研究、看護教育学研究、Vol.10 No.1、2001
- 8) 伊藤千恵、松井幸子他、男子学生の母性看護学実習における教育的配慮の考察、群馬パーパス大学紀要、No.6、P.88-89、2008
- 9) 原田秀子、臨地実習における学生の達成感に影響する要因の分析—4年次学生に対しての縦断調査を通して—、山口県立大学看護学部紀要、第10号、2006
- 10) 尾原喜美子、高橋永子、橋本和子、岡田久子、小松輝子、松本智津、看護学生の捉えた男子看護学生が母性看護学を学ぶ意義、看護・保健科学研究誌、9(1)、P.51-60、2009
- 11) 眞鍋えみ子、笹川寿美、松田かおり、北島謙吾、園田悦代、種池礼子、上野範子、看護学生の臨地実習自己効力感尺度の開発とその信頼性・妥当性の検討、日本看護研究学会雑誌、Vol.30 No.2、2007